

氏 名	ロディオ・トロフィムチェンコ
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第18号
学位授与日	平成27年3月5日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンとジャック・ラカンの理論 における「見ること」の分裂
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 田中正之 副査 武蔵野美術大学 教授 柏木博 副査 武蔵野美術大学 教授 板屋緑 副査 京都大学 教授 新宮一成

内容の要旨

フランスの精神分析家ジャック・ラカン(1901-1981)は、心理的な次元で視覚における分裂を分析するために、美術の領域へ目を向ける。フランスの美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン(1953-)は、美術作品における視覚の分裂を分析する際に、精神分析の領域に目を向ける。彼らの学際的な出会いはいわば視覚の「ダークサイド」で行われる。つまり視覚における不透明性、見ることに伴う見えないこと、視線における眼差しの登場を取り上げる時に、見えないことも視覚の一部だと強く主張する時に、見るために目を閉じる時に、二人は出会うのである。本論文の目的は、精神分析の観点からディディ＝ユベルマンの理論を考察し、この学際的な結びつきをより豊かにすることである。

主体への注目という精神分析の大前提を美術理論に与えるディディ＝ユベルマンの研究手法に従いながら、イメージに近づくときの知性の「確信的な口調」を抑えて、イメージを完全に掴むことのできる対象としてではなく、知る主体に抗う部分を持つものとして見てみた。

第1章ではイメージの不知の部分をつかみ上げさせる「アナディアメンの動き」について論じ、ディディ＝ユベルマンの「知ることなしに見る」と「見ることなしに知る」という避けられない対立について考えた。選択自体を拒絶し、意識と無意識の間で変動する「立場」、弁証法的な方法を提案しつつ、裂け目としてのイメージについて触れた。こうした無意識の機能を、その開閉機能を行う割れ目／裂け目として扱ったのはフロイトとラカンの精神分析理論であり、我々はディディ＝ユベルマンの「裂け目としてのイメージ」を理解するために、それをフロイトのメタ心理学の視点から、つまり局所論的、力動論的、そして経済論的な側面から考察した。そして本論文の核となる三人の研究にとって重要な「糸巻きゲーム」を例として、イメージとその構成自体にある喪失の働きを明らかにし、それ

を強調するために喪失を覆ってしまう視覚、つまり「視覚の幾何学的な空間」を取り上げ、「組み合わせ模様」としてのイメージについて考えた。さらにはイメージの中で働く裂け目と喪失を強調するために、田口和奈と槇原泰介という二人の日本の現代アーティストを取り上げ、ディディ＝ユベルマンの方法論に従いながら、イメージに視られているように彼らの作品を分析してみた。

その流れに沿って不可視の痕跡を見出し、それを論じる方法を構成したのち、第2章ではイメージを実証主義的なピンから外し、生き生きとした、羽ばたくものとして見ることを試みた。その際には、作品解釈の多数性／並行性と、その関係性を強調するために、精神分析理論における視覚症状（例えば夢）におけるイメージの変身とそれを把握する思考の回路を明らかにした。

そこでフロイトが行った「コペルニクス的転回」に基づいて、関本幸治の作品解釈を試み、見る主体が取り得る構造上の位置、イメージに対する複雑な関係性とその関係における欲望の動きを示した。フロイトによって分析された「五月の甲虫」の夢と狼男の「ジガバチ」の夢を例に、「欲望を孕んだ重層決定のネットワーク」として構成された解釈方法を調べた。

さらに、ラカンの「コペルニクス的転回」の理解とその発展に目を向けて、彼が考えた主体の落下を示す可能なシステムを明確にするために、擬態という現象、そしてラカン自身の視覚経験における（擬態と光の関係の）主体の落下の出来事を説明した。第2章の終わりでは宮澤男爵と古林望美の作品を取り上げ、「形象化された形象」ではなく、「形象化されていく形象」として、彼らの作るイメージを蝶のように捉えた。

第3章では笹山直規の《Egocentric Story》(自己中心のストーリー)を出発点として、「開かれたイメージ」という現象を明らかにしながら、彼の作品における事故／トラウマのイメージの変形、つまりモチーフから自己イメージへ、自画像からディゼーニョへ、ディゼーニョの破壊から事故としての絵画へ、そして最終的には絵画自体の「開き」から見る主体の事故へ至る過程を辿った。笹山の作品の解釈によって、このイメージの変形の力と、作品の「症状的な価値」の関係を明らかにした。

この様にイメージ、その制作と視覚経験の構造の中に「開き」ができ、我々は第4章で美術のイメージの根本的な構造、その中心と形成的な力の分析に移った。ラカンとディディ＝ユベルマンの理論にとって重要な位置を占める、フロイトが見たイルマへの注射の夢に現れる開いた身体は、夢の中心になった心理的な状況を反映していた。その夢に関する思考をラカンの解釈と合わせつつ、トラウマ上の把握不可能な空を中心として、そのまわりに形象上のパトスを発生させる、イメージと同一化可能な単位が分岐していく構成を分析した。イルマの夢と同じ構造を持ち、ラカンが美術作品の構造に当てはめた「空をめぐる組織化した壺」を用いて、本論文で取り上げた作品それぞれをディディ＝ユベルマンの視覚／美術論から考察するとともに、ラカンのいう視覚の分裂に不可欠な空の働きと壺の構造を示した。そしてそれを明らかにするために、ラカンの述べる美術作品の構造を明らかにさせる対象、つまりジャック・プレヴェールのマッチ箱、壺、円筒形のアナモルフォー

シス、幽霊と注射器を取り上げ、ラカンとディディ＝ユベルマンの理論における、美術作品の構造との関係においての視覚経験の分裂を前面化した。

審査結果の要旨

●論文の概要

本論文は、フランスのイメージ研究者・美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのイメージ研究を、精神分析家ジャック・ラカンの理論を参照することによって批判的に発展させながら、「イメージとは何か」をめぐる問題を論じたものである。個別的・具体的な美術作品についての歴史的・実証的な美術史学的研究というよりは、イメージをいかに捉えるかということをめぐる理論的・思弁的な美的研究である。

本論文の主眼は、イメージを、それを「見る」という体験のもとに捉えること、そしてイメージを、イメージとして、イメージのままに把握する、その方法論を論じることにある。そのために申請者は、イメージにおける「空(くう)」という概念をめぐる議論を展開している。

美術批評においても美術史学においても、イメージは言語によって把握される。そしてまた視覚は言語によって構成されているという理論(言語によって世界は分節化・構造化されており、その分節化の象徴形式にしたがって「見る」)もあるように、イメージを「見る」という経験は、往々にして言語的把握へと回収されてしまう。しかし、実際のイメージには、そのような言語的な(「象徴界」による)把握を逃れ去るもの、把握できないもの、認識されないものが潜んでおり、それは見えず認識できないという意味において欠如であり、欠損であり、裂け目とも言うものである。申請者は、これをイメージにおける「空」と呼び、それを前提とした、イメージを見る見方を考察している。ラカンの有名な一節である、こちらを見る海に浮かぶ空き缶のように、その「空」も、イメージを見ている人を見ているのであり(それによって、観者は視野の支配者、主体、主人ではなくなる)、観者を見る「空」は、「現実界」がそうであるように、観者を振り回し、揺り動かし、「見る」という経験に大きな役割を果たす。

このようなイメージの「空」を認めたくて、では実際に作品を見るとき、それはどのような行為となるのか。申請者は、イメージに「アナディオンの動き」を見ること、そして蝶のようにひらひらと飛び回るものとして見ることについて論じ、イメージを固定的で安定したもの、静態的で既に形象化されたものとは見ずに、むしろ動的に、形象化されつつあるプロセスのなかに宙吊りになっているものとして「見る」ことを主張する。「アナディオンの動き」とは、イメージを、海中に沈んだり、海上に浮かびあがったりというような動きをするものとして比喩的に捉えたものであり、「見えないもの」と「見えるもの」、「認識されないもの」と「認識されるもの」、あるいはラカンの用語を用いれば「現実界」と

「象徴界」、そういったものの間の弁証法的せめぎ合いとしてイメージを「見る」ことである。

●論文の構成

論文は、以下のような構成となっている。

序論

第一章 喪失に支えられるイメージ

第二章 蝶としてのイメージ

第三章 開かれたイメージ

第四章 「空」をめぐるイメージ

結論

第一章では「アナディオメンの動き」について、日本の現代の作家である田口和奈らの作品に言及しながら論じられ、第二章では、関本幸治の作品を解釈しながらイメージの蝶のような「生き生きとした」動きが扱われている。第三章では、笹山直規の交通事故のイメージをとり上げつつ、イメージにおける「空」の働きが「現実界」(ラカン)の問題と結び付けられている。第4章では、イメージにおける「空」について、フロイトの「イルマの注射の夢」を参照しながら、理論的に考察されている。

●論文の成果

ディディ＝ユベルマンの主著は、ミニマリズム彫刻を論じた *Ce que nous voyons, ce qui nous regarde* (1995年)などをのぞき、すでにかなり日本語の翻訳が出版され広く知られている。しかし申請者は、既存の翻訳においては「奥底から現れる運動 un mouvement *anadyomène* (イタリック体は原文による)」(『イメージの前で』)とごく一般的な表現として捉えられ訳されてしまったものを「アナディオメンの動き」と訳し変え、重要な概念をはらむタームであることを明らかにしている。そのようにディディ＝ユベルマンの方法論の理解に新しい光を与えるとともに、申請者は、イメージにおける「空」の概念を強調することによって、ディディ＝ユベルマンのイメージ解釈の方法論を、ラカンのイメージをめぐる理論を参照することによってさらに発展させ、イメージ解釈のための方法論に関して深い洞察を示した。

●審査の経緯

審査当日にはまず公聴会を行い、続いて審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表および質疑応答を踏まえて、申請者への審査委員による質疑応答を行い、申請者が退席後、最終的に合否を判定した。

公聴会では、「絵画の知識」が制作や鑑賞に与える問題などいくつか重要な指摘がなさ

れたが、とりわけ精神分析的アプローチが孕む「閉鎖性」、つまり現実に人々が生きる社会とイメージとの結びつきについて論じることが予め排除されているという点をめぐる質疑は、本質的な問題提起とも言えるものであった。この問題に関しては審査委員会においても引き続き議論され、そもそもラカンの理論において社会性が捨象されていること、しかしサルトルの眼差しをめぐる議論（『存在と無』）のように政治的な視座を持って論じられた視覚論もあることなどが論じられたが、申請者の研究上のアプローチは、あくまでもラカンの立場に立つものであることが確認された。

審査委員会ではまた、本論文の議論の中心にある「空」の問題に関しても議論がなされ、その概念が表す意味について申請者にさらなる説明を求めたうえで、それが新たな知見をもたらす射程の広さを持つ点などが確認された。とくに「空」と「小文字の対象 a」（ラカン）の関係や、「空 (void)」と「充溢 (plenitude)」の弁証法的関係性について審査委員より見解が述べられ、その理論的重要性が指摘された。

以上のような質疑応答と議論を経て、最終的には審査委員全員で、本論文の意義と価値を認め、博士号の学位にふさわしい学術的レベルを有するものと判断し、合格と判定した。